

くらしの歴史をふりかえる

— 日記および日常生活史史料 —



(福富長者物語より)

今年の資料展示は「日常生活史」に注目してみました。藤原道長が綴った『御堂関白記』(複製)をもとに、彼の日常と生涯、その時々思いなどをたどってみます。また、おとぎばなしの絵巻物に描かれた人びとの生活のひとコマ、京都の庶民の暮らしと四季折々の行事を描いた図会、江戸の職人たちの仕事ぶりなど、なんでもない日常を精一杯生きてきた人びとのくらしの歴史をふりかえります。

※展示の詳細については、別途資料を展示場所にてお配りしております。

※倉本一宏教授による資料解説を予定しています。

展示資料一覧

《平安》 御堂関白記と道長

御堂関白記(複製)

藤原道長 [著]; 立命館出版部編. -- 立命館出版部, 1936.

《中世》 おとぎばなしと民衆 / 僧侶の日常

福富長者物語

神谷詮敬写. -- 神谷詮敬, 安永 4 [1775]. 1 卷 (絵巻); 39cm

季瓊日録

[季瓊真蕊, 亀泉集証筆録]. -- [書写者不明], [江戸初期]. 11 冊 ; 29cm

《近世京都》 京の四季とくらし

京雀 7 卷

[浅井了意著]. -- 田中文内, 寛文 5 [1665]. 7 冊 ; 27cm

京童 (きやうわらべ) 6 卷

中川喜雲撰. -- 山森六兵衛, 明暦 4 [1658]. 6 冊 ; 27cm

都林泉名勝図会 5 卷

秋里籬島 [撰]; 佐久間草偃, 西村中和, 奥文鳴画. -- 小川多左衛門, 寛政 11 [1799]. 5 冊 ; 27cm

都年中行事画帖

江馬務 [著]; 中島莊陽 [画]. 197 枚 ; 42-44×45-47cm

《近世江戸》 江戸の職人とくらし

江戸職人歌合

[石原正明]著. -- 鹿田静七, 文化 5 序 [1808]. 2 冊 ; 26cm

職人尽 狂歌絵入

十返舎一九著. -- 森屋治兵衛, 文政 10 [1827]. 10 丁 ; 18cm

見立番付 為麻疹

[出版者不明], [18--]. 1 枚 ; 36.1×24.4cm

《平安》御堂関白記と道長 1

「嫡男の奈良下向を心配して、和歌を贈答する道長」（寛弘元年（一〇〇四）二月六日）

解説

十三歳の嫡男頼通が勅使となった春日祭当日の記事。表には、雪が深かったこと、藤原公任と和歌の贈答があったこと、藤原実資に昨日の祭使出立の儀への参会の御礼を述べたことを記し、裏書には、花山院（一条天皇の一代前の天皇）との贈答も含めて、和歌をまとめて仮名で記している。

表にまだスペースがあるにもかかわらず紙背に記している点、紙背にも「六日」という日付を記している点から、和歌をまとめて紙背に記そうとした意図がわかる。古記録における裏書というものの機能がよく窺える例である。なお、五日の裏書は、表の記述の文章の途中で紙背に続けて記しており、単に表に書ききれなかったために紙背に記したものであろう。『御堂関白記』の裏書は、この五日が最初のものである。

六日条の紙背の左側には五日の分の裏書が記されており（裏書では左側ほど日付が前になる）、六日の分を記すスペースは限られていた。花山院からも和歌が届き、それに返歌を送ったことは想定外だったようで（何故に花山院が公任と道長との和歌の贈答を知ることとなったのかは、興味深いところであるが）、少ないスペースに小さな字で無理矢理に記している。

脱字が多いのはいつものことであるが、何度も和歌の字句を書き替えているということは、日記を記す際にも和歌の推敲を行なったのであろうか。花山院からの和歌も、いったん「雪の」と書いてから抹消線を引き、「をちのゆ」と記しているが、どのような事情があったのであろう。

六日の表の記事の上に「、」が記されているが、これは六日の箇所はこの辺であるとの「あたり」だったのであろうか（三橋順子氏のご教示による）。

本文

六日、庚申。暁より雪下る。深さ七、八寸ばかり。左衛門督の許に消息を送る。和歌有り。返し有り。道貞朝臣を以て、右大将に昨日の事の恐れの由を示し送る。

（裏書）

六日。雪深し。早朝、左衛門督の許へかくいひやる。

わかなつむかすかのはらにゆきふれはこゝろつかひをけふさへそやる
かへり、

みをつみておほつかなきはゆきやまぬかすかのはらのわかなゝりけり
華山院より仰せを賜ふ。女方を以てす。

われすらにおもひこそやれかすかのゝをちのゆ木まをいかてわくらん
御返し、

三かき山雪やつむらんとおもふまにそらにこゝろのかよひけるかな

訳文

六日、庚申。 藤原公任・花山院と和歌の贈答

暁方から雪が降った。深さ七、八寸ほどであった。左衛門督の許^{もと}に書状を送った。和歌を添えた。返^{かえ}り事^{こと}が来た。道貞朝臣を遣わして、右大将に昨日の参列の感謝を伝え送った。

(裏書)

六日。雪が深い。早朝、左衛門督の許へこのように云って送った。

若菜摘む春日の原に雪降れば心遣^{こころづか}ひを今日さへぞやる

(=若菜を摘む春日の原に雪が降っているので、心配を今日、遣わしたことだ)

その返り事は、

身をつみておぼつかなきは雪やまぬ春日の原の若菜なりけり

(=身にしみて心許ないのは、雪がやまない春日の原の若菜であることよ)

花山院^{かざんいん}から仰せを賜った。女房を遣わして贈られた。

我すらに思ひこそやれ春日野のをちの雪間をいかで分くらん

(=我でさえも心配なことだ。春日野の遠い雪間をどのようにして分け入っているのであろう)

私の返り事は、

三笠山雪や積むらんと思ふ間に空に心の通ひけるかな

(=三笠山に雪が積もっているだろうと思っている間に、空に心が通ったことであらう)

参考文献

藤原道長の日常生活 / 倉本一宏著. -- 講談社, 2013.3. -- (講談社現代新書 ; 2196). p81-82.

藤原道長「御堂関白記」 : 全現代語訳 / 倉本一宏[訳] ; 上. -- 講談社, 2009. -- (講談社学術文庫 ; 1947). p72-73.

《平安》 御堂関白記と道長 2

「長女の皇子懐妊を祈願して金峯山詣を敢行する道長」（寛弘四年（一〇〇七）八月十一日）

解説

閏五月十七日から金峯山詣の長齋に入った道長は、八月二日に京を出立し、十一日に金峯山に詣でた。道長は、金剛蔵王が湧出したという御在所（現大峰山寺山上本堂付近）に参り、一条・冷泉院・彰子・東宮の為（何故か花山院は入っていない）の理趣分（性欲を解放する経という）八巻などの経巻を埋納したが、その前にまず小（子）守三所に参っている。やはりこの金峯山詣には、彰子の懐妊祈願という意味も含まれていたと考えるのが穏当なところであろう。

この時に埋納された経巻は、六百八十四年後の江戸時代元禄四年（一六九一）に山上ヶ岳から出土した金銅経筒の中から発見された。経筒に刻まれた銘文、および経巻の文字は、道長の自筆と推定される。『御堂関白記』の自筆本に記された字とは異なるこれらの端麗な字もまた、道長の本質なのである。経筒には、出立前に「寛弘四年八月十一日」という日付が刻まれた。ということは、何としてもこの日に埋納しなければならないことになる。当初はゆっくりと金峯山を目指していた道長であったが、途中から雨の日が続き、最後の数日は、苦勞して登ったことであろう。

なお、道長が具注曆を持って金峯山に登り、毎日、現地で日記を記したのかどうかは不明であるが、七月末から八月末にかけて、自筆本の下部に等間隔のシミが付いている。八月三日条をピークとしており、裏書の五―七行目あたりに見えるものがそれである（表では十日条の下部に付いているもの）。あるいはこの頃、金峯山で雨に降られたことと関連するのであるだろうか。

ちなみに私は、道長と同じ四十二歳の年の八月、金峯山に登った。その日も雨模様で、道長の執念を、すぐに実感することになったものである。今回、すでに道長が出家したのと同じ年齢になってしまっていたものの、久々に登ってみたが、天候がよかったおかげで、前回よりも随分と楽であった。

本文

十一日、甲辰。早旦、湯屋に着し、水十杓を浴む。解除して、御物の前に立つ。小守三所に参上す。金銀・五色の絹幣・紙の御幣等・紙・米等を献ず。護法、又、同じ。三十八所に詣づ。同じく又、幣等を供す。五師朝仁、之を申す。被物を賜ふ。次いで御在所に参り、綱二十条・細盖十流を献ず。御明燈を供し、経を供養す。法華経百部・仁王経□□は三十八所の御為、並びに主上・冷泉院・中宮・東宮等の御為。理趣分八巻、八大竜王の為の心経百十巻を、七僧・百僧を請じ、供養し了んぬ。講師・呪願に綾の掛一重、五僧に白き掛一重。

十一日。百僧に絹一疋・袈裟一条。未前に七僧に法服・甲袈裟を送る。余には宿衣。御燈申上の僧に単重。七僧の布施、□□百僧の布施、米二石・信濃三端。

諷誦百端。満寺の僧供料、米百石。又、前年、手づから書き奉る金泥法華經一部、此の度、書き奉る弥勒經三卷・阿弥陀經・心經等を、同道の僧七口を以て申上す。講師、覺運大僧都。呪願、定澄大僧都。読師、扶公法橋。唄、懷寿。三礼、明尊。散花、定基。堂達、運長。皆、被物あり。件の經等、宝前に金銅の燈楼を立て、其の下に埋め、常燈を供すなり。今日より初む。今日、諷誦を修す。五師・三綱に禄を給ふ。別当金照・朝仁等に白き褂一重。自余に単重。権大夫、經を供養す。七僧・三十僧。七僧に疋絹。金照に単重・米三十石を加ふ。□源中納言、之に同じ。我が經に次いで、女方、經十部を供養す。我が御明の百万燈、皆、所々の御為に有り。事了りて所々を見るに、霧下りて、意のごとく見えず。房に還る。金照に褂を賜ひ、即ち下向す。夜に入りて、寺に宿す。祇園。

訳文

十一日、甲辰。 金峯山詣／經供養・埋經／帰途に就く

早朝、金峯山寺の湯屋に着し、水十盥を浴びた。解除を行なってから、蔵王権現に献上する物を御前に立てた。小守三所に参上した。金銀・五色の絹の幣や紙の御幣、紙、米を献上した。護法社にも、また同じく献上した。三十八所に詣でた。同じくまた、幣などを供した。五師朝仁が、献上の次第を申上した。朝仁に被物を下賜した。次に蔵王権現御在所に参り、綱二十条と細蓋十流を献上した。御燈明を供して、經を供養した。法華經百部・仁王經□部は三十八所の神々のために、また主上(一条天皇)・冷泉院・中宮(藤原彰子)・東宮(居賢親王)のためには理趣分八卷、八大竜王のために般若心經百十卷を、七僧と凡僧を招請して供養した。講師と呪願師の僧に綾の褂一重、五僧に白い褂一重、凡僧に絹一疋と袈裟一条を下賜した。經供養が始まる前に、七僧に法服と甲袈裟を贈った。他の僧には宿直装束を贈った。御燈明申上の僧に単重を下賜した。七僧への布施は、□□であった。凡僧への布施は、米二石と信濃布三端であった。諷誦のために百端を納めた。寺中の僧供料として、米百石を下賜した。また、先年(長徳四年)、私が自ら書き奉った金泥法華經一部と、今回、書き奉った弥勒經三卷・阿弥陀經・般若心經を、同行の僧七口に申上させた。講師は覺運大僧都、呪願師は定澄大僧都、読師は扶公法橋、唄師は懷寿、三礼は明尊、散花は定基、堂達は運長であった。皆に被物を下賜した。この經は、蔵王権現御在所に金銅の燈楼を立て、その下に埋め、常燈を供すのである。今日から燈し始めた。今日、諷誦を修させた。五師と三綱に禄を下賜した。別当金照と朝仁に白い褂一重、他に単重であった。春宮権大夫(藤原頼通)も、經を供養した。七僧と三十僧については、七僧に疋絹を下賜した。金照には単重と米三十石を添えた。□源中納言(源俊賢)も同じようにした。私の經のついでに、女方(源倫子)の經十部も供養した。私が供養した御燈明の百万燈は、皆、所々のためである。經供養が終わって所々を見てみると、霧が下りて、思ったように見えなかった。金照の房に還った。金照に褂を下賜して、すぐに下向した。夜に入って、寺祇園に宿した。

参考文献

藤原道長の日常生活 / 倉本一宏著. -- 講談社, 2013.3. -- (講談社現代新書 ; 2196). p221-224.

藤原道長「御堂関白記」 : 全現代語訳 / 倉本一宏[訳] ; 上. -- 講談社, 2009. -- (講談社学術文庫 ; 1947). p318-320.

《平安》 御堂関白記と道長 3

「長女が皇子（後の後一条天皇）を出産」（寛弘五年（一〇〇八）九月十一日）

解説

九月九日夜半、彰子に産気が起こり、十日が明けると、道長の招集に応じた諸卿が続々と駆けつけた。ところがこの日は、物怪が出現するばかりで、一向に御産はなかった。この日、道長は土御門第を訪れた藤原顕光と藤原公季には面談したが、その後定子の兄である藤原伊周が参入しても会おうとはしなかった。藤原実資は「事、故あるか」と記している（『小右記』）。これまでの一条後宮の推移を考えると、道長が定子の兄である伊周を怖れるのも当然であった。道長の女である彰子が一条の皇子を産むとなると、その際に「あの女」や「その父」の物怪が出現するだろうと道長周辺が考えるのも、これまた当然のことであった。

翌十一日の昼ごろ、「御物怪がくやしがつてわめきたてる声などの何と気味悪いことよ」（『紫式部日記』）という状況の中、「平安に」皇子を出産した。道長は諸卿に、「たまたま仏神の冥助によって平安に遂げた。喜悅の心は、喩えようもない。気持は、敢えて云うこともできない」と、その喜びを語った（『御産部類記』所引『小右記』）。まさに栄華の「はつはな」といったところであろう。

ただ、行成の『権記』には、「午剋、中宮は男皇子（敦成）を誕んだ。仏法の靈験である」としか記されていないし、何よりかつての敦康の誕生時とは異なり、諸史料に一条自身の喜びの言葉が残っていないことが気にかかる。ともあれ、これで敦康は、道長にとってまったく無用の存在、むしろ邪魔な存在となったのである。同様、伊周をはじめとする中関白家の没落も決定的となった。そればかりか、外孫を早く立太子させたいという道長の願望によって、やがて一条との関係も微妙なものとなる。

この十一日条、「各有差、」まで記して「。」を付し、前日の十日の部分にもなだれ込んで、ここにも「。」を付した上で「同時御乳付、」以下を記し、圏線を引いて十一日条であることを示している。この慶事を、道長はどうしても紙背に裏書として記したくなかったのであろう。十日の部分に記されている「同時」以下の四十六字は十一日条の記事なのであるが、十一日の部分がまだ空いているにもかかわらず、何故に十日の部分になだれ込んだのかは、不明と言わざるを得ない。

想像をたくましくすれば、どうしても紙背に記録したくなかった道長は、十日の部分になだれ込んで記したものの、案外に記すべき記事が少なかった（皇子誕生の儀式でてんやわんやだったのであろう）、「御湯鳴弦」以下の記事を十一日の部分に記したといったところであろうか。

なお、広業が読んだ『孝経』を、自筆本では「教経」と記している。「孝」を書く段階で、「孝」を偏とする「教」が頭に浮かんでしまい、「父」を記してしまったものか。

本文

十一日、戊辰。午時、平安かに男子を産み給ふ。候ずる僧・陰陽師等に禄を賜ふこと、各、差有り。同じ時、御乳付し、臍の緒を切る。御湯殿を造り具へ初む。酉時、右少弁広業、読書す。『孝経』。朝夕、同じ。内より御劔を賜ふ。左近中将頼定。禄を賜ふ。触穢人に依るなり。御湯の鳴弦、五位十人、六位十人。

訳文

十一日、戊辰。 皇子敦成誕生

午剋に、中宮が平安かに男子（敦成親王）をお産みになった。伺候していた僧や陰陽師たちに禄を下賜したことは、各々、差が有った。同じ時剋に御乳付を行ない、臍緒を切った。御湯殿の具を造り始めた。酉剋に、右少弁（藤原）広業が、読書を行なった。『御注孝経』であった。朝夕、同じものを読み聞かせた。内（一條天皇）から御劔を賜った。左近中将（源）頼定が使者となって来た。禄を下賜した。産穢に触れてしまった人であるからである。御湯殿の鳴弦は、五位十人と六位十人であった。

参考文献

藤原道長の日常生活 / 倉本一宏著. -- 講談社, 2013.3. -- (講談社現代新書 ; 2196). p111.

藤原道長「御堂関白記」 : 全現代語訳 / 倉本一宏[訳] ; 上 -- 講談社, 2009. -- (講談社学術文庫 ; 1947). p364.

《平安》御堂関白記と道長 4

「一条天皇辞世の句・崩御」（寛弘八年（一〇一一）六月二十一日・二十二日）

解説

六月二十一日、ついに一条は重態に陥った。召しによって近く伺候した行成が漿水しょうすいを供すると、一条は「最もうれし」と仰せた。一条は行成を更に側近く召し寄せ、「此れは生くるか（自分は生きているのだろうか）」と語っている（『権記』）。亥剋（午後九時から十一時）になり、一条は身を起こし、彰子も側に伺候する中、辞世の御製じせいのぎよせいを詠み、再び臥すと人事不省に陥った。聞く人は皆、涙を流した。

それにしても、自筆本の三行目、「とおほせられて」を、古写本では四行目で「とおほせられて」と漢文風に書き替えているのが面白い。より普通の漢文に直そうという意識がはたらいたのであろう（ただし、干支を写すのを忘れている）。

なお、行成はこの歌を「その御志は、皇后に寄せたものである」と、定子に対して詠んだものと解している（『権記』）。歌意からは、「君」はまだ生きていて、しかもこの歌を聞いている彰子のこととしか考えられない。しかし、行成は日記の中で「中宮」彰子と「皇后」定子をきちんと使い分けており、一条が辞世を詠んだ対手を定子と認識したのである。かつて彰子を中宮とした（つまり定子を皇后とした）際に決定的な役割を果たした行成であればこそ、その思いは複雑だったのであろう。

翌二十二日、一条は、「上皇じょうこうも時々また、念仏ねんぶつを唱えられた」という状態で、死の時を迎えた。辰剋たつ（午前七時から九時）に臨終りんじゅうの気配があり、しばらくすると蘇生そせいしたものの、数時間後の午剋うま（午前十一時から午後一時）、ついに崩御したのである。春秋三十二歳。道長は素気ない記述しかしていない（「崩」を「萌」と書き誤ってもいる）。

死亡時剋を「巳剋」（午前九時から十一時）としているのも、道長自身が最初の臨終の際以降は一条から離れていたためであろう。

本文

二十一日、癸亥。此の夜、御悩、甚だ重く興り居給ふ。中宮、御几帳の下より御し給ふ。仰せらる、

「つ由のみの久さのやとりに木みをおきてちりをいてぬることをこそおもへ」

とおほせられて臥し給ふ後、不覚に御座す。見奉る人々、流泣、雨のごとし。

二十二日、甲子。巳時、崩じ給ふ。候ずる人々に座を立たしむるを示す。候ずべき人々を相定めて侍らしむ。「候ずべし」と申す者、多しと雖も、行事有り。仍りて候ぜしめず。

訳文

二十一日、癸亥。 一条院、中宮に御製を賜う

この夜、一条院の御病悩は、甚だ重く発おこり続けなされた。中宮ちゅうぐう（藤原彰子）が御几帳みきちやうの下におられたので、一条院が仰せられたことには、

露の身の草の宿りに君を置きて塵^{ちり}を出でぬる事をこそ思へ

(=露の身のような私が、草の宿に君<藤原彰子>を置いて、塵の世を出る事を思う)

とおっしゃって臥^ふしなされた後、不^ふ覚^{かく}となられた。見奉った人々は、流^{りゅう}泣^{きゆう}すること雨のようであった。

二十二日、甲子。 一条院崩御

巳剋に、一条院は崩^{ほう}じなされた。私は、伺候していた人々に、座を立つことを命じた。伺候すべき人々を定めて、お側に侍らせた。「一条院のお側に伺候したいと思います」と申した者が多かったのではあるが、朝^{ちよう}廷^{てい}の行事が有る。そこで伺候させなかったのである。

参考文献

藤原道長の日常生活 / 倉本一宏著. -- 講談社, 2013.3. -- (講談社現代新書 ; 2196). p265-267.

藤原道長「御堂関白記」 : 全現代語訳 / 倉本一宏[訳] ; 中. -- 講談社, 2009. -- (講談社学術文庫 ; 1948). p148.

《中世》 おとぎばなしと民衆 / 僧侶の日常

福富長者物語

神谷詮敬写. -- 神谷詮敬, 安永4 [1775]. 1巻 (絵巻) ; 39cm

資料の解説

放屁の芸が中将に認められて富を得た「福富」という名の男と、それをまねて失敗する「乏少」という名の男を描いたお伽草紙絵巻。二巻から成る『福富草紙』の下巻のみを一巻本のお伽草紙として改作したもので、福富が裕福になった後から話は始まり、以降は失敗する乏少の方に焦点が当てられている。『福富草紙』の成立は南北朝時代と言われており、日文研が所蔵する『福富長者物語』は安永4年(1775年)に書写されたものである。なお、二巻本では成功する男の名が「秀武」、失敗する男の名が「福富」となっている。

展示箇所の解説

富を得た福富夫婦の館。多くの衣装が置かれた寝室で、夫婦が暖を取ってくつろぐ様子や、「富めるが上に富み、楽しきが中を楽しみて、棟に棟をあらそい、蔵に蔵をたてて…五つのたなつもの(穀類)を耕さずして、庭にみちみちたり」との詞書から、当時の富裕層の生活が伺える。また、台所では杵で臼をつき、中将の使いの者から鱈の子が持ち込まれるなど、館の外からでもその裕福な暮らしは容易に見てとれるため、隣の家に住む乏少がうらやむのも当然と言えよう。

※本書のデジタル画像は、日文研のデータベースの一つである「絵巻物データベース」で見ることができます。

<http://db.nichibun.ac.jp/ja/>

参考文献

福の神と貧乏神 / 小松和彦著. -- 筑摩書房, 1998.6.

花鳥風月 ; 蓬萊絵巻 ; 文正の草子(二) ; 福富草子 / 中野幸一編. -- 早稲田大学出版部, 1989.1. -- (奈良絵本絵巻集 / 中野幸一編 ; 別巻3).

御伽草子 / 市古貞次校注. -- 岩波書店, 1958.7. -- (日本古典文学大系 ; 38).

男衾三郎繪巻・長谷雄雙紙・繪師草紙・十二類合戦繪巻・福富草紙・道成寺縁起繪巻 / 梅津次郎,岡見正雄編. -- 角川書店, 1968. -- (日本繪巻物全集 / 角川書店編集部編 ; 18).

資料の解説

相国寺の塔頭、鹿苑院内にあった蔭涼軒主歴代の日記。『蔭涼軒日録』『日録』とも呼ばれる。

当館所蔵の記録は欠落部分はあるものの、永享7年(1435年)6月ー延徳2年(1490年)2月の55年に及ぶ。

蔭涼軒とは八代将軍足利義政が設け、その軒主が将軍と鹿苑院主との連絡役を果たす場所であった。記録は幕府の動きや外交、宗教行事などの公的な史料である。

季瓊真蕊(きけいしんずい (1401-1469))は日録の前半の筆者。足利義教の帰依を受け、政治に深く介入。応仁の乱の一因を作ったともいわれ、近江に一時避難して後、上洛。

亀泉集証(きせんしゅうしょう (1424-1493))は季瓊の弟子で蔭涼軒職を補佐した。季瓊の死後も跡を継いで勤めた。日録の後半の筆者。

展示箇所の解説

a)寛正三年(1462年)二月十五日 (巻之 5: 八丁ウー九丁オ)

松泉軒は相国寺内にあった季瓊真蕊の居寮であるが、ここが新造落成するので来月にも御成り下さるようにと季瓊から義政に披露し、その障子画は小栗に依頼したと告げると、義政は小栗にかなう者は他にいないだろうと言ったという。

小栗とは小栗宗湛で、この松泉軒の襖絵をきっかけに義政の御用絵師となった。

義政は東山山荘(銀閣寺)の造営を中心に徹底して芸術を追求した。その様子が『日録』には数多く示されている。

b)文正元年(1466年)七月六日 (巻之 9: 七十一丁ウー七十二丁オ)

禅林では仏事とは別に、日頃の学習・稽古の成果を披露する場として詩会が催された。

文正元年七月六日には、かつて足利義満の時代に蔭涼軒で詩宴が催されて以来の雅会があり、会場には季瓊所持の「風吹海棠」の画軸が掛けられ、「秋日海棠」を詩題としたとある。

参考文献

五山文学用語辞典 / 市木武雄編. -- 続群書類従完成会, 2002.6.

蔭涼軒日録. -- 臨川書店, 1978. -- (増補続史料大成 / 竹内理三編 ; 第21巻-第25巻).

亀泉集証 / 今泉淑夫著. -- 吉川弘文館, 2012.11. -- (人物叢書 / 日本歴史学会編集 ; [271]).

足利義政 : 日本美の発見 / ドナルド・キーン著 ; 角地幸男訳. -- 中央公論新社, 2003.1.

庭園の中世史 : 足利義政と東山山荘 / 飛田範夫著. -- 吉川弘文館, 2006.3. -- (歴史文化ライブラリー ; 209).

《近世京都》 京の四季とくらし

江戸時代には、後に名所案内記や地誌と総称されることになる、各地の地理・歴史の案内書が数多く出版された。『京童』や『京雀』はその最初期のものであり、やがてこのジャンルの集大成とも言うべき「名所図会」へと発展していく。『都林泉名勝図会』の著者である秋里籬島が、安永9年(1780年)に刊行した『都名所図会』がその先駆けで、それが好評を博したことを受け、各国あるいは各街道に焦点を当てた「名所図会」が、続々と刊行されていった。

京童 中川喜雲撰. -- 山森六兵衛, 明暦4 [1658]. 6冊 ; 27cm

資料の解説

江戸時代初期、啓蒙教訓のために著された仮名草子のうち、名所記に分類される一群の文芸書の最初のもの。洛中洛外 87カ所の神社仏閣・名所の由来や伝説を記し、各項に図版と古歌、および自作の狂歌・発句などが添えられている。著者は松永貞徳のもとで俳句を学んでおり、序文によれば、故郷への土産として本書の執筆を思い立ったようだ。挿絵については誰の作かはっきり分かっていないが、当時の風俗を知る上での重要な資料となっている。

参考文献

京童:京童跡追:京雀:京雀跡追 / 野間光辰編. -- 臨川書店, 1976. -- (新修京都叢書 1).

京雀 [浅井了意著]. -- 田中文内, 寛文5 [1665]. 7冊 ; 27cm

資料の解説

京雀(きょうすずめ)とは、浅井了意の著作とされる京都の町並みや名所の案内記である。江戸前期寛文4年に成立し、仮名草子形式の7巻7冊で翌年に刊行される。巻1には京都の沿革、歴史と内裏の構造について述べ、巻2以後は洛中縦横の通りごろに町名を記して、その由来・現状、また、町内にある寺社・名所・旧跡・名物名店を記している。実用的な京都の地誌で、『江戸名所記』に見られた過度の文飾や『東海道名所記』のような小説形式の文体も採用されていない。近世京都の町々を調べるのに便利な資料である。

参考文献

京雀 / 鎌田道隆. -- 小学館, 2000. (日本歴史大事典 1).

京童:京童跡追:京雀:京雀跡追 / 野間光辰編. -- 臨川書店, 1976. -- (新修京都叢書 1).

都林泉名勝図会

秋里籬島 [撰] ; 佐久間草偃, 西村中和, 奥文鳴画. — 小川多左衛門, 寛政 11 [1799]. 5冊 ; 27cm

資料の解説

享保 20 年(1735 年)刊行の『築山造庭伝』を参考として書かれた、京都における名園、名勝地の案内記。題名の「林泉」とは「庭園」の意味である。

本書の最大の魅力となっている挿絵は、西村中和、佐久間草偃、奥文鳴の三名によって描かれている。雪景色や夜景など、他にはない珍しい風景描写がみられ、挿絵に工夫を凝らそうとした姿勢がうかがえる。

京都の庭園史や社寺変遷史などの研究における、貴重な資料となっている。

参考文献

都林泉名勝図会 : 京都の名所名園案内 / 秋里籬島. — 講談社, 1999-2000.

都年中行事画帖

江馬務 [著] ; 中島荘陽 [画]. 197 枚 ; 42-44×45-47cm

資料の解説

京都の祭や年中行事の絵と詞書を収めている。絵は日本画家の中島荘陽氏によって描かれ、大丸にて展覧された。これを永楽屋の主人細辻伊兵衛氏が買い、風俗史研究者の江馬務氏に解説の執筆を依頼した。江馬氏は 1928(昭 3)年に細辻家に納めている。江馬氏は跋に、時代の流れにより変わりゆく年中行事が将来なくなるかもしれないと記している。近世から近代へ変わりゆく風俗を伝える資料となっている。

行事解説

・針供養(はりくよう)

二月八日と十二月八日は、裁縫を休んで針の供養をする。これらの日はともに「お事」といい釈迦を供養する日である。仏には「お事汁」といって豆腐・菘蕪・大根・牛蒡・人参を小豆汁にて煮たものを供え、人々も食べた。故に、針の供養に豆腐・菘蕪を用いている。京都では西京区の法輪寺で針の供養会が営まれる。手芸・芸能の守護仏である虚空蔵菩薩を祀り、平安期清和天皇が針を納める堂を建てたことから、針供養の風習が始まったという。一般でもお針子が師匠宅に集まって針供養をする。

・出初式(でぞめしき)

新年初めに京都の岡崎公園にて行われる消防の出初式。公園にて機械用具の検閲・分隊行進・模擬消火があり、放水ポンプの唧筒(そくとう)による水柱などを見るために多くの人が集まった。江戸時代は竜吐水という小さなポンプを使うだけで破壊消防を主とした。明治時代に輸入された蒸気唧筒は後に自動車唧筒に代わった。

参考文献

江馬務著作集 11 / 江馬務. — 中央公論社, 1978.

京都大事典 / 佐和隆研ほか編 — 淡交社, 1984.

図説 江戸時代食生活事典 / 日本風俗史学会編. — 雄山閣, 1978.

近代日本服装史 / 昭和女子大学被服学研究室編. — 近代文化研究所, 1971.

原色日本服飾史 / 井筒雅風. — 光琳社出版, 1989.

《近世江戸》 江戸の職人とくらし

<「職人」と「流行病」からみる江戸のくらし>

鎌倉時代から、職人を題材とした絵は多く描かれており、時代を追うごとに職種も増え、その時代と共に職人の形態も変化している。江戸時代にも、多くの職人を描いた絵巻や版本が刊行され、こうした資料から江戸時代の人々の暮らしぶりを見ることができる。

はしか、天然痘などの流行病は、一度に多くの人にかかり、江戸時代では死亡率も高かったため、人々に恐れられた。江戸時代末期には、流行病の錦絵が多く出回り、流行の様子、養生の方法、食べ物の禁忌、病気の疫病神を退治する方法などが、世相諷刺とともに描かれた。

職人尽：狂歌絵入

十返舎一九著；2. -- 森屋治兵衛，文政10 [1827].

資料の解説

江戸時代には、「職人尽絵」と呼ばれる様々な職人の姿が絵入りで書かれた版本が多く刊行された。「職人盡：狂歌絵入」は、桶屋、畳屋など 38 の職種について、それぞれ絵と狂歌で描かれており、職人が使用する道具なども細かく説明している。

展示箇所の解説

- ・時計師(とけいし)・・・ 時計師が内部の機械を全て手仕事で作っているため、製作日数、制作費がかかり、時刻の調節にも専門家が必要なため、一般に普及はしなかった。
- ・袋物師(ふくろものし)・・・ 布や革で袋形のすべての入れ物を作る人を袋物師といい、袋物屋で販売された。袋物には、皮籠(泊まり番の武士が夜具を運ぶのに使用)、段袋(京阪の婦人が野外に遊ぶ時に使用)雑袋、鼻紙袋、煙草入れなどがある。
- ・瓦師(かわらし)・・・ 江戸時代当初は、瓦葺きは禁止されていたが、度重なる大火のため、防火対策として幕府が瓦葺の屋根をすすめるようになり、江戸時代後半には、庶民の家に普及した。
- ・仕立物師(したてものし)・・・ 江戸時代の女性の裁縫師は、雇われて針仕事をするが多かった。裁縫は、女性にとって必修のたしなみであり、嫁入りの資格でもあったので、母親に習ったり、縫寺子屋に通ったりした。

参考文献

江戸職人図聚 / 三谷一馬. -- 立風書房, 1984.

古写真と錦絵でよみがえる江戸時代おもしろビックリ商売図鑑. -- 新人物往来社, 2009. -- (別冊歴史読本 43; 第34 卷 13 号; 通巻 835).

江戸職人歌合

[石原正明]著；上，下。 -- 鹿田静七，文化5序 [1808].

資料の解説

江戸中期の国学者・歌人で、本居宣長や塙保己一の門下生であった石原正明(1760~1821)による著作。

50種の職人を左右二組に分けて、それぞれの身になぞらえて詠んだ歌の優劣を競う、歌合わせの形式をとっている。

展示箇所の解説

下「二十二番 左:水くわしや(水菓子屋) 右:上菓子屋」

西瓜の立ち売りと、最中の量り売りをする二種の菓子屋が描かれている。17世紀末から上方を中心に発展した元禄文化の影響を受けて、菓子文化が大きく花開いた。古くは果物と菓子は同じものを指したが、果物を「水菓子」と呼び、いわゆる加工した菓子との区別が始まる。京都において、宮中や寺社等へ納める献上菓子であった「上菓子」が江戸に入り、貴重な白砂糖を用いる上菓子に対して、黒砂糖や水飴を使う庶民向けの「雑菓子(駄菓子・一文菓子)」が作られるようになった。

参考文献

職人歌合：中世の職人群像 / 岩崎佳枝. -- 平凡社, 1987. -- (平凡社選書 114).

職人歌合 / 網野善彦. -- 岩波書店, 1992. -- (岩波セミナーブックス 106 . 古典講読シリーズ).

[見立番付]^{はしかのため}為麻疹

[歌川芳盛画]. -- [出版者不明], [18--].

資料の解説

麻疹が流行すると、医者やかご屋は商売繁盛するが、寿司屋、風呂屋などは商売にならない。東を「あたりの方」、西を「はずれの方」とし、麻疹によって儲かったもの、損したものを番付表のようにあらわしている。麻疹によいとされた食べ物が高騰し、庶民の生活を圧迫した。

展示箇所の解説

○あたりの方：菓種屋 厩の別当 医者さま 雇い人 籠屋 かるやき屋 無病の居候 ふるたくあん にまめ なし くずの粉 かんぴょう

○はずれの方：女郎屋 芸者 炎天屋 船宿 冷やっこい 天ぷら屋 そば屋 寿司屋 湯屋 髪結いどこ 酒屋 盛り場

下の段は、「ないないづくし」の歌になっている。

「どこのおいしゃも ひまがない ふなやど さっぱり のりてがない
かごやは よるひる やすみがない なすや きゅうりは たべてがない さかりば さっぱり 人がない」(一部抜粋)

参考文献

はやり病の錦絵：nishiki-e, color prints of infections / 伊藤恭子編. -- 内藤記念くすり博物館, 2001.